

E-32 理論食料費試算とその展開(第8報) — 年間収入5分位階級別実態食料費差の分析 —

佐賀大教育 ○出石康子 琉球大教育 新垣都代子

目的 展開の第1の方向は、理論食料費を食料費設計の資料として活用する第1歩として、その情報化を志向した、理論食料費変容の指数化・体系化にあった。第6報から始まった展開の第2の方向は、これら理論食料費を媒介として、実態食料費の変容を要因別に分析し、その変容の構造化を通して、食料費変容の質にふみこんだ検討を試みようとするもので、今回は年間収入5分位階級別の実態食料費の変容に関するものである。同一年次間の全世帯と勤労者世帯の収入階級間の比較検討のみにとどまらず、勤労者世帯については、時系列における各収入階級別の変容の特色についても検討を行なった。

方法 家計調査年報(54年報~59年報)によつて、各年の全世帯・勤労者世帯の1人1日当たりの実態食料費、ならびに理論食料費を試算し、各年のそれぞれの全世帯平均・勤労者世帯平均を基準として、各年の収入階級別の実態・理論両食料費の変容量とした。さらにこれら変容量を昨年同様の方法によつて、1)食糧構成差によるもの2)食品の100gの価格差によるもの3)栄養摂取差によるものに分けた。時系列については昭和59年勤労者世帯各階級それぞれの平均を基準とした。

結果 同一年次間の全世帯と勤労者世帯の収入5分位階級間にみられる実態食料費変容の標態は比較的似通っていたが、各階級間には変容の構造も量も異なることが認められた。各収入分位階級の時系列の差の変容のパターンについては、要因間の変容のパターンのちがいの大きさが目をひく。価格差要因による変容が各階級共圧倒的に大きく、食糧構成によるものは小さい。最近の栄養摂取による伸びは、2分位階級が4分位階級を上回った。